古今和歌集正義　春上

四

香川景樹大人著述

古今和歌集正義

春上下
夏

東塢塾藏

古今和歌集正義巻第一

春歌上

在原元方

年のうちに春は来にけり一とせを去年とやいはむ
今年とやいはむ

去年より春と来にけるを今年とも言ふ
今年と言ふ年也それを
旧き恵慶法師白雲は
匂ひやと云ふ年間
もなくて年とも
ところ去年とも

うちみあれいやちり今年といふ
つもごなるひとつの心より春来ると
とは思ひなされて去年とやいふ
もとの今年とやいふ也

○去年今年と書出てよりいすくに明る年は春となるまでも然れ
同一年の内なるを今年去年と年
よりに跨る明年は書ざるをえざるとの一つにて
うちあてすくなきを以て春こゝにありとの
とやいて年こゝにやうやくあるをえてとりあへず年とやいふ
こゝろ意也味之

袖ひちてむすびし水のこほれるを
春立つ日の風やとくらん

春こゝちけふの日よめる

袖ひちてむすびし水のこほれるを
春立つ日の風やとくらん

水過ぎて立出くなつさひし詞なれ
て又ゝくる例春ともめんすもむとつよとみなくめるも
ゆく月日を年立つ風ゝくさひしく感じたる也

○除按抄る或説ゝ書よりも共事をやそのつゝ
心をそひつゝんとゝく注共人のまゝ
多を水と結ゝ事ゝとの遠鏡を思よれる共ゝ非也
袖ひちて結びし水と過去ゝ
ゝくる去ゝ朝ゝなつさひ水のさまゝゝんや又常ゝ水額(ミツカメ)

とに白ひく頼あるこゝちもすこさなとせんをすまをして張てそふ
〳〵くんやせろ〳〵ひきこなとそをもてそ〳〵名れ掬(ムス)ふ西をもて
〳〵く掘(クム)のあをさそんのおのゝ水面を神代つくつさ納涼の
さま思ふ西し

○　お所もすゝを夏こそ
〳〵るた非也水もすゝふ六七月ころにしく八月ころも及ふ一ふ
このまゝこみ〳〵ふ氷なとりも更に筆硯(ケウト)く氷こそん寒暑をのさ
ろをきて張すゝ夏水るそをなとわくなれ心なれい枯を着
くなと思ふなとまなきこ事也又ふす立春此日を甚こそり
あことくく解まろに名也と立春之月東風解氷なとい

公界の理りふまのをくまこそ今日ふさ〳〵宣く吹風なとく久ん
すこんとこひりたる也

顕志ふ

春のきこそたやう川こみすゝ舟のよ〳〵好くやまを雪はこりはく

二句風雅拙き好歌たるとも書こそ春ふいれたるやと書もとふれふ
春歌なとれる慈鎮和尚の歌もたるやいつことりもとそ春
来ふとそきのふ〳〵ふの也長雨ふ赤ふこそろいつこいれる夜
そおきこさる芳野此ふまいまこ雪のふまるをと雪ふ方を地ふ
乃く震める宮也先つ〳〵こいふの也建仁ふ書来て也

ふまをはくをつ紀氏の歌よ山つれて雪うまおこふる春かすこの月
とさてこめてたちつそ降らんなと打つる雨しおもむき也

○餘枝よ春ふ来く霞のたつといふこそ古野の宮
ハ雪ふ拂ふりのをそく打向ふ今も春へるれと霞いはこふる也
そらん云ゝ遠境よ春カ来テ霞ノタツタハトレトコテヤソトヨ
ろ晴服也こハ霞める空をつんとの先ふろ調ならん事ありふへう
すきう餘寒ふもまならんやい華後春めきて長雨ふき歌の
中よつまるをつるつ一古来好ふ霞ふ霧ふこと霞ふこと立
らんと云意よ聞ふるは誤脉よ誤き也萬葉巻五太宰帥旅
人卿の庭の梅をめてゝ大伴百代乃よめる歌よ烏梅(ウメ)能(ノ)波(ハ)奈(ナ)良(ラ)知良
久波(イツク)伊豆久志(シカ)可須(スカ)尓(ニコ)我乎許能岐(ノキ)紀能夜麻(ヤマ)尓由伎(ユキ)波布理(フリ)都(ツ)々
とよるをまふおふり其梅をつんつよめる風よくゝめく散るまをの
なる雪そゝくのやしむ雪よまなる成くふるは今と同きふ也

二条ふ后乃春のそらめの御歌

雪ふうちふ春きぬるふひまのこゝろまる渡(わた)いまやそふらん

此処喜ふ須ゑ二条乃后を伝位を止られさるなれ此集よ春の
書つゝまるとの修枝拗よ事実を論ふく委ふくふるあれる事
也拗よ新撰和歌集ふ此歌ふ入ふ人ふ此ふ新撰いまし
と後位の花うれ花ふ志ふる人ふ也ふ海ふ花ふ春の子ふこれ海や
乃歌次の梅の枝よ来ふ此ふ雪乃中よふくの海歌と二首

○餘枝ふる年此雪に心まつ波れハ淚を
よこなし給ふ

誠なる書先きて色ハ何なるとこんなと面白く
こそとけんすもと此雪中ふく聲此詰られるを仏かりそ
ふそ此雪ハ何なるとこんなと面白く
もはるそ此雪ハ何なるとこんなと面白く
書なたもとんも更ふ今此詞書を加てれく旅後此よ
こんとしますわつれ此二ふの仮とある所もいふ趣とく
一新撰ふ佳句ふ解らんとなるう心しきの風雪此中を凌て
新撰ふ佳句ふ解らんとなるう心しきの風雪此中を凌て
こんとしますわつれ此二ふの仮とある所もいふ趣とく
書なたもとんも更ふ今此詞書を加てれく旅後此よ
誠なる書先きて色ハ何なるとこんなと面白く
こそとけんすもと此雪中ふく聲此詰られるを仏かりそ
もはるそ此雪ハ何なるとこんなと面白く
一

となかせそらめも

題しらす

梅の枝に来ゐるうくひすなにをかも
梅の枝より来ゐるとはいふ

と雪の降つゝ春の着るを妬むる歌也

○ 除枝に梅の枝に来ゐる鶯なりとも春うけてまこと雪に降つゝ
とゝのふる心こゝろ春うけてや雪共に工とみるも打聞遠鏡も今く是
に似つゝ共也来ゐる鶯なりともいまこと雪に降つゝ春うけてや
こゝろひそめたる一体の歌也打聞ちがひて
一向つまらぬ歌あんや除枝又其しらべこゝろをさすの打聞

きりてこれを春のひくく共詞の置所おかつゝれきやうなれど例も
あるをとりて拾遺の物名共四十九日とつゞ事をかうなる異
さまれる歌を求め出て證とせりこれと牧つゞまこと其詮まこゝろ
を尋ぬるに頭注密勘共つゞこと詞を解まこゝろより然おもく
しくつゞけさるけるを梅也年内よりも鶯共元日よりつゞく鶯を春
かけて鳴とくもん何の異論の侍らん矣鶯一日数も泣くして春
の日数も満さるにこのけてとくいふも外なき也こゝ鶯を春共梅
雪にみの梅と推定めたる也中共規模よりとこゝろく真景をも忘
まてるけあやまりも也又諸注乃如くこゝろの時を乗ゐる共詞有てい
ふこと也おもふに

雪よ春な降りそ梅の花ともみつ
はる雪のそこら花ともみつるまで
ぬく春たちくよ雪も寒もと
まつ鴬聲すもこゝち初まけ
れるをおもひけん雨しろうち
愛くん此夕もよをなるこゝろ
とり三首も雪中此寒うく
○餘枝と此歌皆家萬葉に載せ張り彼作の心寛平御時后
宮の合の詞ともも此今乃あとやまを引合せ舎人親王
雪乃降れるを題くよまれるを彼歌合此時おもまこゝろ

素性法師

いつもこゝ此こそ彼序の文意を解し得ざる此語也彼集も寛平
后宮の歌合此事乃ごとくあり是貞のみこ此家乃歌合歟也
人此口碑よりつる所の事ども撰定へたるもの也さるこゝ
古風なるもあり俳諧めきたるもさるこゝ其時宮こそにある
古を擇ぶよりにまの也こゝろのなれる也まこゝ此歌を撰書の
まゝみなくゆかしく寛平歌合此事あるこゝと知へし
○お開き是もたゞ雪此春乃降こゝれるを見て雪をまつけて
よめる故此其春よりきたりて咲へ集乃詞をこゝ
やすくみもくすこゝろすよりこゝれる實
景よりてよめる歌此雪を設おくゆかしき枝此雪此なく

とゝろ〳〵くゐ法そろへさもめなもむや迎受とつゝともせ〳〵心あろ
ん侭りへさもめもれ真んそ先つゝろ〳〵ます次や古人よおろそやや

歌〳〵

こゝろせ〳〵深く花のてゝものもとゝ

ある人のいとくさおれおかれ雪れ花とこゆうん

結句奥義抄頭本帯こゆるこゝと有そ正〳〵のもけ密勤も異義
とゝきれめい古本いなゝく然かゝ也又凡ゆうんとあゆくいてにをは
第ひく本れ句ろそりれいとゝ少なりあますこい波授る躬恒ろ
まさ立とやつるゆる春ロ心消あ雪れ花と凡ゆうんと云ゝ来句
とまされろなろゝいはゝとろこむ笠ロ雪心さ〳〵深くてあ

走いかろ心れ増る歳走る雪已そま二ゝと凡ゆ心ちすと折なろやさ
多通消あゝめそ消んとして消さろみく村こなるをゝ深てゝもり
ゝれそく深く居走さまそ仏なかそてゝれゝろん
とつよむる語まそ来ろ花とみゆろとゝいる調さゝれつりの通密勤
まれとりくつまそれ意ろつんゝろれるいあやまれ走いこゆ
ろとゝふまとりつうんやいさもつまろゝれ

○餘花云花よ深く春れゝこそ河が咲んと思ひやゝれい消通
ぬまそそろなきこゝ已我仏ろやと凡ゆもと通云ゝ古れ深く
きなれそこれを雪れ本よ降ゝれろとのゆろなろゝさとゝ云ゝ
此通是そ歌〳〵すとゝてわりもくろる古れ歌乃増このきそみ

て用つき事なくさなんやうの意なりと今聞ゆる雪と思ふよりおくれ出ると見ゆるあへぬまでくもれる雪を云なとにつかさる意歟のよな旨事なく又消あへぬそのそのの事海のきを津あへぬ事かとりてとまれと云みそこひこそっそこ霞光ともむ遠きとも此雪の心さへ深くなとおとろかさる語調因迎き若歟をおくれらんや用知へー

○遠疎ふ雪サへマタロクニ消ヌノニ其殘テアルホノ枝ノ雪カハヤ花ニ見ユルとよめる此歌を異説ありて若歟の格とこそうよめりくくう同ときめつきぬ説をおふるもこれ

ハたく消果ぬ雪共花とまてのみるく何事となきやや又同書ふ説歌古く同のまたにの句をかりうれるなり此格歌葉ふ多へとりかたるそはとうけくひくくうたう語勢の宮ゆえて自然歌となれるなきこと深てそれとよめる口調を学ふ者へきなり万葉ふ多へとよめる基おれり

二條の后の春宮ともやせけう時正月三日おまへ

かてぬ事とうあひくる雪共ゆ降ける日てりかう雪共ゆ成てふりくる雪と成てふりくるあひたふ

文屋康秀

作枝の東宮北御先ぐさを春ごとに添ふ

紀貫之

雪北峰々をよめる

霞こめこし北先をまづゆきてとなたちりくる

藤原言直

まのあたりよめる

はるやときそ花やおそきと問ふもうん鶯こゑをなのまもあらず

いこのそのく花北おそきと思ふより春北妻こふる雪よりやとく

きと志らく鳴よさまよひくそ鶯こゑのそんいこまと

問ふくつきとよとなるとりも鳴くは花のおそまは宮ま

らんをまとも志らく女郎よかくく問ふものむとつみせて作合ハ

なるを御よはきそまれもやさる定まるをなとふもむやをを

こころそのくをきゝくよこそなす訳とるれるあこそる延喜帝意

春ともくして梅をさの歌ふ鶯こゑをなの作ぐさもむてきをと

作こそんをのくあやとりくよこれきりもの北おあやと

ところのようつゝてを實情こまりて感あるもの也

壬生忠岑

春きぬとひとやこゑも鶯のなのあるうきりえあらしとやおふ

寛平御時きさい北宮乃前合の歌

源まさすこ

宿る勢ひとゝもに歌のひまことにうちつゞきなやみ病める者の花
餘枝云仁和の宮ハ七條仁泥亘也此歌宣公母藤原仁和四年
十月六日入内皇家萬葉集序ニ寛平五年とあれと歌合ハ
まりさゝきなる一一立仁ハ九年なれと初めの四一一て仁の宮と
ゝもとゝも歌共意吟つけ一一
○ 亦同し宮共哥合のこと
ハ撰ら歌也とゝもに時也撰もる新撰萬葉共宮の此集ニ入
ゝる凡八十首餘也一つゝの中ニ寛平御時仁宮の哥合共歌と
ゝる也十首餘り是貞親ヨ共家の歌合乃ゝおとゝる十首も
ゝる也歟也二十首ゟ多也ハ或ハ歌あり或ハ歌一一ま也とれも新

撰より撰ら歌ニつゝとる事明ら也一又新撰ヨハ引なく仁
者と志ゟとれとゝる此集ヨ其名を挙られゟ歌多ハく歟ゟ
ゝる也一やのそ此撰者達を彼歌合乃人数なまて其事ニ
親くとられん事論なし一後なる新撰を撰一きる此集ニ
此意をゆく古をとゟ歌乃多ハ
紀ゟ也共を

花共このゝ多の事ゟりてとゟ一一
世ゝ来一き人を始乃ゟく一一萬ゟ取ゟ一一新一一ゟ歌ニ
ゟ事共あるゝ思ひよせゟく四共萬をつゞきなひとゟ一一ゟ
とゟ吹通ゟ風乃ゟとくゟゝ此撰ゟとゟ一一ゟ花

在原棟梁

まくらとてもかりねもわすやまとけりのうこの旅ねも夢うなく

題しらす

よこ人しらす

のへちかく家居しつまひまの庵なる隣も知らくさく

里とほき家もしめくる風とりのすだく賀茂の瀬見うらまち

あさとにきくもとめ共意得しさすまひしものから夢共

夢のさめ方しき事なとのひくく家なる住居をいとう今も家居の居る重

あやまちきなとのひくく家なる住居をいとう今も家居の居る重

あろなと思ふへくもあらす

ん事何事のあらん一本家居しそれとつとを同之あまり

と詞をとわやもおくるるなる仮ふしをかうを居まと共詞をそれまと

もとて後よりなれたる成一

○除松に詞をくさくと題歌に賞をあらと暁鶯と

て詞をかめしくなまそつとめて毎なくことよろこん

さよめる也と泊せられまと呉日とにとつと仏迎前菜十五樟

ちとろ山辺く家居しそつきそやうん賞共考梅共それと計の

のこ家居共色一ろをあろ一賞のくろこれろまて意得あり

つーとのろへ仏迎引ろ萬葉共歌へかよの史詞をくとも執毎も

もよのまくへ日毎まをあろへ一今共執のくまくとつるを詞ろ

すとのこうけいくさ然のうち春れ雪を梅まるる万葉中よ初をくをロ
毎とのんそよろしきよ仏くろあるしよりく今ををしよ思つるなう
一一其日毎日もよき河のう奇をを賞をを初をくとうふくさの猶まあう
事なく雪雪よ安やをもさくいそそ驚れさまれをのなくまずいま
そのうめまの学初の朝衛のの雑さうなうんい海を待つうます今をく
題泊よ地ふ一
春日野もくうけなやきうう若草れはまのを篭まりわまも跳まり
おそ春良人のこまくま雪なと引おく飛遊よ歩くうよのをちー
みくくまりい飛焼よさくをあまと飛つるなうんさそ長の
さまは今をそうれのう雑更よはくまりみこまよ人をよ

月のつきものうみた野よ遊てみとふとを本うくれ歌を岡をとなく
よ引つくひをのよ初まふくれまたちまうをを筆まちとのをそうしそくく
昔をを筆まをとふのうはさされたこのまうい専う雪なのれうう初く
思のーた野よ遊てをおまのをくことをうとけいつくひをよ遊を
んくふこの流とをいひくー紀氏あのよ若葉はむこれを人見い海
みとうはへの雪を言のうをなんをを陸外を安れさまをよをうる古歌
猶今一若草い雪氏机のの一首のくきををあるよ仏くう
書はくとうひの野りをいくくうをよ今いうのの中くくうる家摘ん
みやまみれ、まの社雪うる消なくよ都をのへれをれはこくり
昔こやまみれまれよあうまうる消なくよ都をのへれをれはこくり

とゝめたるを押とゝもとの字を今は晴よと新しき雨の志びくに
移をすゝ津とゝせるを押とゝ久しく津ぬとゝ樟ちた押てた添と云
んの轍也

○古開又推ゐてくうと流れ下き雨ゝ山降ぬ日をめく〳〵ゆく若
葉なるとをよく〳〵生ひんせとゝ辺を祖ゝ野ゝ出てく摘こゝんを云
とのつゝも遠境を是ゝ出ゝ山ゝ降ぬ明なさゝゝ法
こそんとのつゝ諸勢せるゝやうなる調ゐもやうくた詞をつひ
たるめを同ゝ一又推なるくゝ此詞をゐくとゝをゝ教なる亜
出れ共ゐてくとゝをこのゝてゐなゝくとゝきこそんやゝをれいを
とゐもせる例をなきゝ事也せるゝ毎ゐる万葉を引て書ゐ山貝

ゐてまつゝとゝもとゐもを貝ゝ押なるく照とつゝとゝ也とこゝゐ
集巻七ゐ春日山（カスガヤマニ）押（オシテ）而照有（テリタルコノツキハ）此月者（イモカニモサヤケカリケリ）妹（イモ）庭（ニハ）清（サヤケカリケリ）有（ケリ）家里
あゝ詠也貝押てれもと晴よおやゝ遠ゐる也こゝの意ゐ書ゐ也
ゐ出く我庭ゐ押ゐそゝ照ゐる此月歌ゝとつゝ心ゐて陰照也
るをつゝ同巻十一ゐ月ゐ窓越（マトコシニ）ゝ月（ツキ）押（オシテ）照而（テリソテ）と歌ゐ陰照ゐ文字を
ゐけゐ窓越ゐ押なるくゝとつゝゐまつゝるくゝをあくゐす晴ゐ嬉く意
ゐくゝ也同巻八ゐ我屋戸（ワカヤトニ）ゝ月（ツキ）押照有（オシテレリ）とをゝりやゐのく桃園ゐ
ゐてるゝ陰照とゐけるゝおゐゝ又同書ゐ云樟ちた冠婦ゐ
てるとゝ詞ゐ陳ゐくゝ也押くはるとまくゐゝくるとゝふ
をゝつまゝとゐくちをゐくゝとゝつゐも姫也こゝ武

藏あるさまふうけしくなどの格ふくく押さく張とかゝまさく隣句
月ゆゑ久古井話さくわさた今と異なりとこゝまと又本ちゑう
んくに押さるめて拠すまきなあくみた押さく張ともゝのくさ云
さくむさくうも押とのさは今さく古へさまんや
仁和のみこのとみこまくけう時さ人さつのれさまんくる
御歌
君のさゝめまき野さくつむさの花をゆきけふりけく
君の為さとそくくみも出くこの業けむさつまき雪共ゑ
くふとも宴さ御宮さ出くく摘さまんさ此もおさ雪ふ日ゝ
を雪共峰ゆまさけ也さるもゆくようこな〜張てる都さ摘を汲ま

のみやひ也諸注業つさ張ひ〜此へのさまを後のあさそ張ひやうて
思ふけまきゑわのれつむ君こゝろもまふさつまさ今汲さ張ふ
也過をけてふさうふあります

歌ぬさてまひ也とおわせうあ〜時よみさ奉まる

ぬうのき

春日野のさゝのれつさゝやしろたへの袖ふりまきこれさまき秋のさゝ業ひさゝめ
野遊のさまけよの秋あるもゝあるさゝ人のゝうむとゝ庭也
椒也其あるゑ〜きをとゆさて序とゝる當時のふり也神を奉と
うう共古の社をいとも畏ふゆ〜事ゝ論なゝさ風うに思ひまる和

せろう或は遠き境のとも月日必神の恵を蒙りて安らく松竹を
よりて神ろとこそ末まで人松く事也さる時言よ出すー
て松よろかさなれた世乃うまめきけそうふる方よりきくー
たもりう婦女共もそまて處女子ろ神ふるなく多くい
一年も今小まで松きなとこそ児女のそれる同一波よ至く
薄ふ事也神ろとも二年ほ過よくうくさて萬葉巻四末遠女
等也神撥山乃水垣也きとろる今く同一調へ乃事なろう
古のも布留山よかけそれもまふ節なく今たりの松摘よと行
人共ふまさちくのさこ松きたやうよさまも含ろそれ
同まとこそもまもとくとそまんも同まそ引延ろる意ろく

其ことさ庵よ一節なろ勘きとよる用ひられろなろこーふ
撥さけりり出なとよそりふく甚事也一むさふまる詞也頸注密
勘共よ神多もとくとけ社歩りてとふ事也とふされう
状也人のあろろよ社の松ろを神也ふる也と思ふ俗意よて
この詞意也通き原事也今よ世の児女共撥神也古乃松の
也物ろく撥つき社とう也あいむよおのつろう手みくをつみろう
んや思ふー

○倭枕云今梅ふふりろくさふるさことの花ろんとふく古依
日記よろすふ多もろく屠蘇白散酒ふつくもて慕ろ北
ふ書面のありよくふくさ源氏ふ栄よいくての事んさろも

○ 古風云ふもさることなれど
くとやさとの心とものもてり
ける更に何の事となく
つけてり源氏乃心ありてとき
意をもてく乃ふーといふ
ことの意てく異義なきを源氏の
心と古ものと取ときいふ
乃也てく好きとき意を
ふれて極つて又社を打ある
ものてく乃ふーといつる
ものてく今もつて引てる物りてこの詞
意をもてく乃ふーといふ
ことの意てく異義なきを源氏の
心と古ものと取ときいふ
乃也てく好きとき意を
ふれて極つて又社を打ある
くとやさとの心とものもてり
ける更に何の事となく
○ 古風云ふもさることなれど

也てこの片延の字をもてく彼と是とをこあ
祈くとこんのもーとのこんのもー
てる事古語にてこのこーふもこの
みもりてく本社意乃字もゆくこのやうく言語の樞機なるもーら
てる物也ものれもも遠境をも社師誌も
えてく仮字てこ異なるもの片
詞てく句毎ようにてこーてこーてこ詠奉まと作事乃
てこ時もてくやうなるもてりあく奉りあー延ますて此人乃心として
よあるもてを刺もあてる物也
ーこ我乃てろもと云ーてる物也今一ふもこまりよ心もやもそよまれ
ーこ我乃てろもと云ーてる物也今一ふもこまりよ心もやもそよまれ

○遠境ヨアレ白妙ノ袖ヲフツテツレタツテ人カユクハトノツヽも旅也こゝも古郷よりそれ神をうやまふ事と思つる也神ふるさとつゝ招くと旅との外の月なき事也よりて神ふる神

禮然言君之賢也如之何（シカイフキミカヒケナキコトシレ）

乃郷いたやう志のやこまやかなるもてなしを旨へき也

真似也何ぞ悍ふん而業つる也穂積（ホツミノアソカワキクサヲカ）乃阿曇我腋草宇可

歌なきふあらす哉此心よりも哉乃字也よまぬそれやうそ哉の

哉乃字いたやう志のやこまやかなるもてなしを旨へき也

我の字也よまぬ哉乃字也よまぬそれやうそ哉の

哉乃字いたやう志のやこまやかなるもてなしを旨へき也

○遠境ヨアレ白妙ノ袖ヲフツテツレタツテ人カユクハトノツヽも旅也こゝも古郷よりそれ神をうやまふ事と思つる也神ふるさとつゝ招くと旅との外の月なき事也よりて神ふる神

一てとゝめ給へあまと神ふるやとよりも其ことわりもなれ共也こゝも神ふるさとつゝ招くと意得ふる共布留山も神ふる山と思ひこゝもふるさとつゝ招くと同一訣也

題しらす

在原行平朝臣

春なき風のさくらのこゝろをもうつす山風ふきにけらしも

ふる山の雪よりおろす嵐共風乃まぎらはしくたよりまつもみぢ

よめる成一番葉冬二秋之田穂（アキノタノホノヘニキラフアサカスミ）上ホ霧相朝霞なとゝつゝけ

つれなき荻ふ霜も雪はのもとゝ也今もむ

く霧こもたるも霞も霧もさはのもとゝ也今もむ

日（ヒ）なとゝつゝけあまたゝ霧と霞と霧と長

衣のもの多くみな甚衣せるつるに必薄きよのやうくおもふもの
なれど緯を薄くとのしろくさせもて衣を經緯（タテヌキ）あひ均く厚薄あ
つさそのなれど緯を薄くありてつやとうなれいとたつに緯のみな
してよろづにうまいおもふくつ前よりつきくつまれさうにけまさて
必なひくおもうれど衣まのそくに奉れ料としてつやとさて霞をふく
衣よりうともなきまとと前条なるまれ白きこの手ありひくと
ひくそくと七夕機織乃料よりまれ衣天川頃中（ヒレ）なとふるよりも霞
なとふを引及ひくよりそうもの地此奇なとのり薄せそうけき
をつさまつをまを衣とつやとみなをあるう
此事此のつをもさて有なん別る論あも

○倭枕詞つくなれいつきさられ也さく衣前よりつくつきなといひく旅
乃宮まをつくとはみーなるこうのよりとてつやとつる共
よ服也色くに色きよあくすてくに共さまを含むの意ありて係る
さうなやうすーなとうかる前のうちなとつふよりうんやとも色の一云を色まとも色ともいふ
たこてに安さん

○遠境よミタレルテアラウサウニエルとつてるく此也ミタレル
ヤウスシヤとうミタレルヤウニ見エルとうミタル、サウナとう
何とうつふーアラウとうけこまをつさも同意よりて此也
此意よそくうサウミユルの心まをもて矢とすへき也

寛平御時きさいの宮の歌合のよめる

源むねゆきの朝臣

雪きえぬ山の松井のみとりをも春くれたいま一しほのいろまさりけり

歌たてまつれとおほせられし時よみて奉れる

我きみに散てふ事はしかれども花のあるじとなるよしもがな

素性法師

春雨の降そめしより青柳の糸のなかきは思ひしられき

春上　二十一

まきもくの檜原もいまだ雪ふれば木の葉かくせる山ぢとぞみる

この歌ころもの方よりも及ぶことなし

無名抄に云此歌は及ばれぬにや合ぬと侍るは非也一ゑに

強もの詞申す歟は其こゝろ侍るにや

也ゝま所にしもと強ものゝくも及ぬにの等所に

水雪ふるなど枝もたわゝなる激しくて浪を生ずるを見ぐ枝石中より渡あ

ものとおもふ心ばへ也

西大寺大僧正実恵柳もとよめる

僧正遍昭

あさみどりいとよりもこのけさのくもをもぬくくるしき霞を
よめるなるべし古今集春上に
ぬきとめぬ玉とぞ見ゆる白露を風の糸にてよれる柳は
ぬきみだる人もあらなくに青柳の糸よりかくる春雨の玉
ぬきもあへず乱るる春の白玉は誰に見せんとてよれる柳ぞ
ー密勘ともに論なくれたる歟のこと清ー此歌の意ん今いふ歌の意
の詞初句より続くことと同意なるをつゞけそへ柳のことなれーさて
ぬく又字重ぬくこのをぬくるとせるなるべー

題 しらず

よみ人しらず

とくちとやさく川ら春はあらくまほしくも我うゑしやな
百千鳥さへづるとにはあらねども春のくるをぞ人もまちける

き改めゆく中よ猶ふりゆくらん老人よ此遠感哀ふつさよめ
遠近のたつきもしらぬ山中よおもひ入てとよめる此山法なり扨深く奥ありたらん事こよめる歟
場をきゝて其ことはのなき山中よこゝろよめる呼ぶ川なれ
おやつのみさをを也とよめる歟此おもしろくそつ
きなき意なるの一川の詞となれる也ふさい寺よりとよめるむり
同ー

○お前よ深き山よ入てふれたゝ遠き親よ此山中二ゝとよめる
芸よ此也此二句よ鳴雪歟
やまくさき山奥よおもひ入てふれたゝ遠き親よ此山中と

みてハ意を訓も通ふ歌事多くて知ぬ

ひとり寝をきくくまの里々の人を思ひこそやる

凡河内躬恒

書られた歌のつゞきなりしらぬ道のきりぎりすとや泣くまし

今ハ書集られたひとの歌をもとゝのへくらべ彼も越乃も越へこゝろ

とゝのへ給ふ事ハ人のあるをよきゝ一ゝそれ〴〵の折ふし

云傳やきゝ〳〵と通ひ寄て書よき心をしるよりあり

白雲のたち居てこそ思ふとも人の心ハ同しき井のようふことつくやう

人のむすばれた白玉も通ひ路ハ

あはつくをしのぶなるへし

○遠鏡ハ是ハヨイ所ニ行アフタ言ツケヲシテヤロウカト思ふ

よりきくこゝろ共服也逆道ハ通ひ路ハ

ふるさとをつゝ所に寄をきくとゝのふるを

かすみこめたるくまんやきくこゝろ共通ふとつゞるを更なれ事也

歸雁

伊勢

書震きつゝをつゝまずてこゝろくまりをゝ花なきさとにきゝなら

よみ人しらず

ゆきつゝまち花ハあれどもやどる鶯のなく

逸ハのりをこゝろあをれとお立ハ

やともるくまれなれうゑしうゑ人のこゝろあやまれり

今よのやうに家近くうつした梅花をも植しおほくなりまさりたる梅をも植しなどしたるにはあらねどもいとめでたしと賞すべきたぐひにはあらねどもいとめでたしと賞すべきたぐひにはあらねどもいとめでたしと賞すべきたぐひ

を待つ心ばえ

○遠近の庭ノ近イ所ニ梅ハウエマイソトいふ心也近き所へ来ぬ
みよりてやをら折とらんなどいふ歌なども書つゞけたる事本注の如
くなれど此意とすべし川面迄くうねりくねりたる事也
つきあかりなどいふやうにいへる又梅の花のあちこちさ
くなど心得つゝとゝのもゝ此梅花を表陰より裏へ向なす事
有べきなどやうなり
梅の花ちるはの事にかゝるはの事ニかゝるはいづれよりもいふ
あやまり也とゝのふるはの事人を発むるはの事
香をしるべにおりて折るなどいふ心也

やまむ方よりいふ迄其實をそこなひおとしたるをいふ
いづれも其ころくれ前よ過ぐる雨もしくは匂ひの残るをいふ
いまもとそこ迄立よりはその事いまだなほ
と立よりぬ前也古歌よ語もむその事迄ふれとなくいふも語もむ
ほのといふもみく其實をもあむそれなきをしるべ死ぬもの事
身をやくはのり外類ふれ然事をつゝみをも人の悪しく
もなどよの先をを似くる意をも借よ也あまりもつくろくも遂
やすき同を果さる事をそこんとするまやんとする程よなどいふ
ユ同ーたん同んいまこゝ少さゝきの語なるをや皆
おもつゝなる語勢也人の皆ゝ片人香よや觸ゝんと觸迄

○俤花ヲ立よるはの心有ト云ハ立よるの詞の同
意ニ云ル共服ヲ立よるんとするを其ヲ待ま
ろに又志リ共心ヲ立よるとハ云ル立よりなる上の意ヲ
あらさる迄ニ共まこと立よるの詞のおもくなるを強く立より
寄るさまのもとをる共詠迄されど立よるとするかとの同ト云詞な
き事迄立よるんとするほどこそ云ハ迄晴立よるんとするを
立よるやとおもんとをるよの中ニ無理なる詠ニハいとく
ヲ迄

○遠境ヲ梅ノ花ノ下へチヨツト立ヨツタト云ホトノ事カアツタ
力とハいるを服迄是ヲ立ヨロウトシタホトノ事カアツタトハいそ

ヲ立よるとをる中ニ立よるとハ云ル
ヲ匂ひあうハいさゝかなれ
本共ヤよりハやとさゝんとハ
梅の花ヲやとくよの外ニ
うるひまのをゝぬよてゝ梅の
ニ共催馬楽ヲ志柳ヲ作ル
迄これよりてよこ跡ハさく素するふこん先の述懐の詩歌
なるゝに其志ニハいてゝ花やきさうを思ふより初春ノ宴会ヲ
よめ共催馬楽うゝこうるより其意ニ寄共ヲ立よるとハ云ル梅花ヲ折
うる枝ヲ思ひよをく酔ふまでみようけするをくよこ迄跡ハいる

あるを取りて又梅をもて比催馬楽の歌よりも前なる梅を覚えをいとも
る事前なるべくてそめつてふ梅花の花をいと離さまや思ひ
おとこ共御前にて此歌よりて
らんとて共御歌を出せよいなれ又催馬楽の可もすれども詩集の
大歌所の歌よりて出て世を憚へ事へ
事へ試みよ書物を汚すよりとく覚えめよ
花をいとなう有つらん古事を求めて事前を縫て
よめるなるべし又縫てもて返つきくよう強ちのなるべきも
せうみ法師有へ
題しらず

素性法師

よめるあるこのうたをいとうるはしう
大方は花を中に隔りよけもの
ぬ薫をもつくり出梅のこの花を匂もいと清らかに
とうたよりよめる事よく迎まるべし共
の也

梅の花を折りて人におくるとて　貫之

君ならでたれにかみせん梅花
色をも香をもしる人ぞしる

ふる雨山ぶきのうつろふをみて

うつろふと花をもみまじ（咲ぬるとき）
六帖は二句咲ぬる時ぞと有うつろふ

き閨よこのまと咲うちとけ其匂ひよりいち深さとく遠今匂ふ春
いちとくつる共まつより会ひくさき事と思ひてく知一閨のあのとも志る
ふやなんなと思ひやちくなふさてもなん今越ゆくまに更
よのかたすま其しおさえ匂ふの言なくてとと
思ひく詞の上を無きひなれ引くる後世のさのう成一條枝の詞
書まに夜といふ人ふとまとおよりまやといふのも
いつるまいうと言共うよやうなこの事とくのを何うえ疑ひん乱二句
のおもつのれさよりがる意つるとと人のえひまに共をるとてよめる
月夜よ梅のかれをおくと人のえひまに共をるとてよめる

ふつる

月夜よ共そまとをふえひうちる光共花をうつてうちる人ふり久保
こそ月おもろきおやむとなきまへなとよ始うるあれう
めりてと宣うなるへ遊向く聞きうんなおりてう夜ふさ
ま思ふへけよ匂ひふうちる人成つき

○ 歩岡よ薫る所を尋くおへ遠続なコレテハ匂ヒラ
尋テ行テ知ウヨリ外ハナイとつる世よ服迄ニ共花と月と両
しよまのうをふるくそれとまおよと香よりて其物をる
の外なとふれい世尋てたりみくちるすてとへ
此まて同のおうたとふく歩法をの今きをつよくきる也
て歌くちるとふる共さをふるを尋ふ初とにとまふへを初薫

るを折て一旬ヒラ尋テ知ウヨリ外ハナイとときて旨めるを
や所とのひ折くとのつる芦よ甚意を得さる趣よめるとそよめん
るとこのるを心を付て一
たゞの夜梅の花をよめる
春共よのやうけあやなうめ共花のつくそ見えやもめく冰
雪のよ共暗き暗とのつゝめなひ梅共もれ月のさしこやこえ
猶其香やと馬まてるとてうくひすもくのこなれ
た暗なの詮の更なしとも好事もたる趣さる共いち冰き梅の香
の暗まもまのゝ女を先つるまてそうひなき事也とそよめん
詮なし意をとのるまて

也とふとれるを當まる
○徐枝よあやなしとも無文也梅をそみてやくすともれと通
を共暗をとく香をそえんこのるをみたやきをなき事也とそよめん
つるも姫也あやなしの詞の如く文をなく多をなき意られを節
のくをぬるとそよめるまてそふこのつゝより一轉して大旁に無意
無詮共意となりくやひすとのつよあくまて拾遺は同人の
香をとあくまて誰をとそよめる梅花あやなし雪こもれこのうそと
よめる是を花をそめやうに得るとも香をるへき意よりて雅も初
らんるは更よ立うひなしと義共働さを無意の事
よいひ落せる也次よ山吹をあやなくときそとのつるも見る人

なくれなと詠るとて梅をよめるにはあらず
かすみこめたるやどの梅のにほひなどいふ
まことに然るべくつきづきしき事なり今も一轉せる方より詞の本意を
とらば又梅をそへてもよろしかるべきを
意をあらせてかくよめるなどいふべきものを
○遠近よ春ノ夜ノ闇ト云モノハワケノタヽヌ物シヤナセト云三
梅ノ花カ暗ウテ色コソ見エネ香カ隠レルカ香ハナシホクラ
ウテモ隠レハセヌ色ハ隠レテ香ハ隠レネハ隠レルテモナシ
隠レヌテモナシトチラ匿ワケノタヽヌ闇シヤハトいふ時は此
こゝをあやなしをうしひとせずるよりと詠るより一首の

詞勢を忘まじくうらもの也古今の也春の也香の也
ふるきをもいはゞ隠をとを家ゐの香を得ずくさふいふるて甚也
闇の詞なしともさふいふるを更也
詞なきを詠むる方よりいふべき也
影もえ見ぬ二方を枝葉詠むるてにやすて次をもかふこゝえ
称身や月故まをや或人いはく月顔の華
うに堪ぬを俗ふるを顔ふるそんえ
やさ姿のあなく常つあり詞也これら嗜姿あるなんる時歌
のこゝ隠まふるを詞なく神のたゝりあるまたんを入れ古へあをふ
なきみく顔をのもいふ隠一得ふる人ぬこる時隠一遂ふりと二

ほとゝぎすなんやと筆意おなじくなきをつゝめども今も
イロコソ見エネ香カ隠レルカ香ハナンホクロウテモ隠レハセヌ
とゝつゝるとひくすう歌を付くる解されたよくかれてをつゝけのこゝ
とゝみくこに解あさんうためを隠レルテモナシ隠レヌテモナシトふ
こゝ蛇足をそつく女房なる解あやまてるもの也
きゝまうつゝるとにやともけう人の家よくくやとそ
やとこゝく泊よくこれをなりれた此家のあるーやくさこゝよりうん
やとやとあるとゝ人出きたそあるよそをゝ板の花也
おくくよのゝ

貫之

人たゝをんをーーす妙ゝとゝけきれろむこの此香こゝ

歌の意明らけー此やりハハ川々まれ長谷へゆく途中也是や
彼寺此宿坊なと思ふこゝろ道なる事ゝ風家集ゝハ也まう
人の家とゝつゝるおのつゝ道なる事ゝ風家集ゝハ也まう
川とそ宿をまーとゝのもさこゝハ途中なる事つゝくまろー

水のおとりて梅花此をまもけろをよめる

伊勢

まゝとしなの海く川をまれとゝくそれぬふそやぬまなん
なる海く川を赤住吉の花とみくまをふまぬくさこれをーおん
とゝ此やそれぬのこゝ其水なのやなく神の湯むまーんとゝふ
まゝとも此春を又此川を花とゝくとつゝ意ゝそこもすまふ

よもつさうや日本紀の例有といふとも此水の名を其川
何ぞ其きさうの文字といふまんや又歌とといふまんを何ぞ煩しく水と書
ざんこそ詞書まで水の名とは定めがたけれ
つるふ底のうもれ流るゝをおのづからもれ是を朝よ川の
ほとりといひ奇なる名を花と見んとする時を忽ち世共常の
おもてたる川と同く細流のくきいさんのこゝろす思ふべし
○遠境よアノ水ノ中ニモ花カアルト見テハイツノ春テモタマ
サレテヲラレモセヌニ折ウトシテハ其水テ袖カヌレルカ今年モ
又ヌレルテカナアラウトいふ詞共此川をやそのそ花の稍
と見くく水共上をも見まてる諧勢をよみ取べし

なれる成て野のうへ水とそつゝと流るゝ都
くつゝと流れる流まで見ゆめるまでもちすゝ流廣うゝ河の傳りよ
あまりて花さへ枝のあもてとうきて流るゝ真つ流るゝ
川の常をたゞまでありまり色うつゝ彼何うゝ隙獣横斜水
清淺とのつゝ一句晴よ符合して同景を詠出せるうゝ
○歩向よ花とそんてさくおんとすまとともすきれなれいそう
まそせうとのつゝ片水也こそ新注のあくまりてこそ此まう
實よ折むとそてなうんやさくく神やぬまなんとをうけられ
事也又云水のやとそと云詞きことのくまず水と書くをのそと

花歌のやうふう月を水の底に沈めて鏡と見たてたる時や墨ぞめ
もてんと思ふ心ありて今歌をかくにも此歌と同時
の詠みくく神や満なんとみましくるを花は鏡とやなくく
を皆底ひまでうつる水の清くなるよりもうめの香ぞ初句は年を経て
そよ共書とおとつるよ同しくく毎年ひんなれ共年をへて
とのひまでくく鏡のやうのものくよりまでうつるなどいふ処作者はよこゝろもなく
けるこゝろなるやうにもとれるを此外なか〳〵
家ゝ有〳〵る梅のそれのもちをけるをよめる歌

貫之

ふるとあるをめづる心ありて梅の花をいふ
ふれぬとこゝろは見あきぬとそれ更にめづる事もなくて
まのひまを得くくかくそ数をあらんと思ふ心ありて
も離さぬ世共なりひをふるそうふ花よ
ひをあらせじとおもふ心ありて人間もとゞめさ
ふは歩驚々々とうつくしく今まで盛とのこゝろをいふ
とうつくしき人のきまを人間といふ事にて世渡もの
うふ詞也さくく此集詞書ふは事をうけたるまをうけたるまで
ち歌とのこゝろをそれまでかきを本とす

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

よみ人しらず

梅がえをおりてかざせるうたてへに
こゝに読人志らずとあるを實ゝ志らぬ時ゝ
ありて詞書をしるさゞるも寛平の元年より処ゝ
おくまでの十八年なる正撰者ども皆其歌合ゝ人数ゝ其
ゝ立なるひとゝよめるゝ入也つゝく其名をゝゝゝ志らぬ人
合ゝよゝ人志らぬを集中ゝ首ゝもゝゝゝゝ志らぬ人
なるべし梅のゝをゝゝゝも神ゝ深く移り志ゝく尚ゝゝれよゝ春

ゝすくとゝも此香う移ゝゝみなう沖ゝとのゝもゝきみを人ゝ移る
とのひ水もうゝそ匂ひのなゝとのゝる如く梅ゝ折ゝ深きゝと
ゝいまんゝとく春ゝすくゝとゝもなゝとよゝゝる也

○餘寒ゝとゝゝゝてゝきさらぎの望ゝ歩向ゝとゝゝゝゝゝと
ゝゝをはゝめゝくゝとゝゝゝてゝとのゝ望遠境ゝトメテオイタラハと
ゝる共ゝ服也てゝきたなまゝゝゝゝゝ

よとあやまこれを聞とこゝろ先おそろしくおもひてまことにかくいふこゝろもむこそ宣命萬葉等ふたら共ともいふるゝ執しとて今まで本とおもひつゝあれとそもそも強て彼意よとおもひとるをも肆をせうる執りて今古ひとゝき事にこそもつく未來現在の違ひさへ出くる也をひらいなくゝる愚ひとれるを昧妄也

素性法師

ちはやふるかみきりのをうたの句ひ共神さひて面白き今いまや敬うと見果くさそ有へき拙を思ひの外なる句ひのいはゆる神つ共ひさをうくとふりくとふるゝ名詞をを思ふまゝよ

おき香共おやみくなるをいふこゝろせうふいふる也

○徐枕と敬とうたくさそこひしくなつさひしくせ共常ならぬ香共神さよとまのやうくに思ふ也

也香のとくまりるをそもそもうそとのみ強くあるさよを則たゞなるんやい又香ふ共ゝてる別様乃字をそあたまへるふ派みくせ共常ならぬ香とせるなれとこそ殊の外うるはしき別様と共書誤つる也

○遠境ヨヒヨシナ事や句ヒカ袖ニコツタとのつる共服也あのそうこて共拘乃意外よりいふんのそせるを軽くも重うをとゝくはの八なすも其香さ事い外よ論をもたうこそを烈しき語そ

まぬ事もまゝ書ましくうとの心なり其中よ此寒さの内梅のさく程
さいひ次の寒さも打ち添をよみ平城天皇の御歌より後貫之のこ
やまぬうれの花をよみ
みな白花とおもふ雪の内の花とよめる後の花といひて
梅そと仏語の類なり此歌も今年より来ん事をいひ
知そめんとてもやうく変とよむ事あるを心をあてあれ
ゆめなうひおれゆる事なかれとの心
○遠境よ春ハ咲モノチヤト云ヲ外ノ櫻ニナラフテ今年
カラ始メテ知テ咲タ此サクラ花ヨトウツ散ト云ヲハ外ノ
櫻ニナラハヌカヨイソトいふも此歌の意

たる事見ゆるとの心なり其事無き同詞ながく度を重ぬる事也さく此なくとも
拘らふまでもなくなすら故也まなのまゝ真似する
事也これを学ぶと習ふ二ツなるを知ず此歌なとの
習ふまでの事ありくるなおゆるなとつゝ教の諸
なれを外の梅を学ぶの意ありて世共なく
動なくはなくとつゝ類のなくおのつゝくおのつゝ
ときまの心ゝ其おの心ゝるを外を見習ふ志の成行
まなれを理をたのもなと思ふんをつゝくるゝ論ずつゝ
すなか事句ゝ表知うもるとつゝをさくまなくおのつゝ

て春ハサクモノト云フヲ外ノ
つねく論じめす
題しらす

よみひとしらず

山高み人もすさめぬさくらゆへ
又も里遠き人をまつかな

やまたかみ人もすさめぬさくらゆへ
又も里遠き人をまつかな

こけ巖にさきたる花も推なへてくおもふ心のあるへし
いつも雪をも花をも思ふ心の深き言を加
へて意得へし

○遠境の山ノ櫻ヲオレカカウ見ニクレハ霞カ一面ニトコモカ

モ立テカクシテ花ヲ見セヌワイトいふ共服せぬく一めやうに
とのみて義共有まふなりてそ花ハ
やさしく共巖を尾もとなくてハ叶ぬ事
知へし

ゆくとのくきさ義共おもふ櫻の花をさも恨へ
花のかおさおほつかなうち君
ゐをたゝくよの風

年毎に共よりもひん老ぬ共あれと花てこれハ初なりひもす
なきさ共院

在原業平朝臣

世共中よたゝくさそ〻なの

○ 俗我ら法を去も数を左こ盡なる泪とを雨を歌八風を
石まなと愛すら余やよんだら一法仏をつるふあるを原事奉法と
服地志の赤なる先だら一法仏をつるふあるを原事奉法と
々や水を無漏へ出うき弥山祖より内狩こせる前一里人乃事ら
けくよく基世乃清け院の老ときをおり八きの原一一兵法園の
花なとふむのつせまる思山巻うす長雨けからまりとつ六
まちやむやうれん畫一の反うあうすいそかりさうる亜

よみ人しらず

頭　一首

いーはうき幸きなるとうれ楊花をおりてをおんりな人乃ら
おうら服うまー

○おなじ人今はの年の春もとしごとにをそこんとおもひつゝ
をそこんとおもひつゝとしごとにをそ取得さうをおりて
こんねをとなくく意をしられたるの歌ありつきもめくあんなも
はさう家詞うくく秋歌の神ときそめくく出なんとつかな
とく同一詠歌をれた鶯取得さうんやうに方ときやいかゝ
味ひうくく

山ざとをたづくよの春

素性法師

はるくとやをそくとよの花をことにやきくく家はとさせん
山ざとをたづくよの人よめくさうんさうそよの家
山ざとあるけく次なる春歌何つ手さうんと
つゝみ詞書と同一ふくく山を望める風さまた同のまと世歌ふ人

くさんくさうんいまことに折てさうそ初めて疑ひなせくく出
して山の桜をはるくとうたふなるやとさうそあるひさ
同ふや歌の意ひとうそ花盛を共見くく語うちとなるんや情
まことふ折て家はとうそ花盛を共見くく語うちとなるんや情
滑うう風きなるもたまきさうきつ手さうそものもおくさうそう
んの意ちへうくまことにとうそ折ひあまうさたる面白き趣
花さめやる意をはるやりくくよの風

みるこせいやなき桜をときまさせくくみやこうきよりおりさなりく
大意花紅葉を秋とはんでも山をこまつ事うそまことなる心を
をはさの花のはんでも山をこまつ事うそまことなる心を
たの意の翰なまきうあき歌の

さくれば山邊を立ちすゝん君のこゝろ霞共めきこゝそよそなり
山のみきのぞまれ共その内ちる共類ひ今一と海を今もとゞめり離
のこ雪も見なくて霜とぢつゝの面白くめぢかくきえやらぬ都をきの
とゞそ靜う春共とつゝるゝ友こゝの意ありて春のつゝ一節ゝ
き霜も見出くるもこゝ共を思ふこゝ植けゝれまゝ衆雀大路の
柳共中ゝ家こゝの梅咲更もこゝんきふとあゝしく織出こゝ錦
なるこゝ

○春雨こゝ見こゝすゝんきのこゝを見をやりてこゝ今こゝまでとつゝる
た服色見わくさゝそゝ代ゝ絶あまこゝ雨こゝ降よあゝ共一日
に見おろゝこゝるゝ海色又ゝことさゝまをゝきまをゝ同一伊

勢物語ゝ去年こゝるのゝとつゝるを服色ことさゝまをゝてゝゆゝ今を梅乃穂をことさゝたるとゝゆゝ
こゝ海なゝ先ゝと去のゝ今をまをゝてゝゆゝ本意ゝまれむゝまれお
礼こゝのなれゝ共礼今こゝることさゝまをゝとゝ共なゝ色こゝる色
今を共ゝまをゝこゝ入ゝまをゝてなゝとゝゝ如く礼ゝ交れるさゝま
ゝこゝゝとこゝまをゝきゝとゝゝ意ゝなゝ一つ共言こゝ成てゝ年共意
ゝ共ゝて見るゝゝきゝまをゝとゝ同一なゝ四説ゝよゝゝこゝふこゝま

櫻乃花共もとゝふこゝ年の都ゝこゝとをなゝこゝそよゝこゝ

紀友則

色ゝ香もお年一貫ふこゝ先ゝと年こゝ人こゝあこゝまゝ

歌奉れと仰ごとありければ

雲霧を殊さらに引掛けたるさまを賞せしものなるべし
のさまざまをおもひやりたるさまを思ふべし

寛平御時きさいの宮の歌合のとき

とも岑

みよし野の山邊さそひて花のさかりあやまちれる
より野たる雪澤さるさまをなしたる夢共同まどひる雪とも
やまこん事然うてさも也古歌共に此題ありてよめるとの
とのやこたえ波掛よみよりくらく山の櫻花白雪とのみこんえ
まどひ波くとよめるなどの類は絶てなきやうなれどもやあらん
やよひのうら山月共あるべき事なるべし

そこそこれらの詞共を引まぜてうるはしくいひ續
風雅抔よばるの詞をとりてよくかなへるたぐひ
ふべきあてこれもたゞよめるまゝにてもおかしくてもあ
もとよりやまとうたのさまざまにて
なべてうすみやびもあり山と山と重なり遠きまで籠もたるあるを
みとみと立なるうへの同とのこと思つるは混めもさくさ風あくら
月必樹木生もの立るものなれど古事記に夜麻紙賀祁理爾
多知弊加牟流波昆呂久麻加斯と有歌より庭麻可牟佐波
家流佐久良爾多大牟等来ゝ大殿祭のとき人ゝ奥山乃大
波小波ホタテ立而木乎ゝなどの事又ゝ風山同ゝ其樹抔よりさて

揚さるゝ事なるべし。今年なども人よこゝろのまゝやたゞ勢ぬ
二句頭本まとゝなうる可き今此利本まゝやうも年と
ゐもとあゐも梁也結句やいかゞあらんなゝ今多くふとなくてこゝ
ます今此ぬく年まもとゐもの歌辞あらんなゝ共結句やそすると
うくさ也同ふくゝさくやもせあとゝうてにをはくゝのくゝ
いとあるゝ句ゝてゐとき侍もう詞なるゝ中ふゝの押詰くゝ句ゝあ
てくるとゐもゝとの二様あゐ此此よりのき節ともゐゐも
よゐゝあ節ゝ句ゝ云侍もう也今いゝ花のゝまゝを人なゝうれぬよ
き事此節あまゝかそのの舎りなゝうゝみくゝいうそゐくゝあれぬ事

そ大方よりのもえ志うゝあゝゝもゝとゐもゝきゐ歌也あれよゐ
とゐゐ此ゝとゝうくゝ也也集中歌ゝ此歌ゝ外ゝ場まをそこやゝ
なゝ共、このくゝ音やゝせあゝゝうゝ句ゝ此ゝうゝ
今ゝを是ゝ一切ゝこゝろゝくゝゝ課ゝ也壁ゝくゝいゝくゝ義ゝて
もみやゝを捨ゐ人をゝゝくゝゐのくゝ黄ゝ共、捨やゝ也あゝきゐり
裏ゝうゝそ誰ゝをこゝやゝをゝ捨ゝきゝをゝゝたゝうゝ句ゝて感する也業えそ
もなゝ鄙ゝをゝをそ人ゝ男ゝうゝそゐくゝこすてやゝせあゝーの
業えゝうんゝ共、今ゝゝ歌ゝ鄙ゝゝ業ゝ捨ゝきゝ也ゝやくゝ捨ゝもくあ
ゐまゝ歌也ゐゐゝ同ゝまゝなゝうゝきゝ上ゝとゝ、ゝうゝき上
ゝとゝとゐもあゝる所の意ゝゝくゝとゝき違ゝあゝゝんゝをゝまゐの

余意大ら異也 前よりも去れさその比事ときれくも委くかゝる也
頭注云 此歌共もまの句を通家朝臣の説奉るも有ぬれやとも
ぬとあれど崇徳院の御説奉るも同侍ども第三句を年こゝろや
侍らん詞をかりもかもて侍ども終句ハ違ふ事なり而ど俊頼朝臣
家奉るとあれやとすると方ともそ俊恵ど其義を釈し侍ど共
世人ど別ど釈しあひく侍るめり安能奉ど此異義有べく
ともなほ上ど今年ごろともとの比ことをもあれやとも
するとい云ども猶ほなほあをあれやともあいたゝ
まじとも人を過もくにやとき事と覚え侍り去かまる年と
ど人のみ共なとの事をあれよりとて俊頼朝臣集裏書ど

昭垣ら侍時鳥歌奉ども云ふ共ハ詞つゞひも同事也
ど又春ハ共歌ど共ともかくあれらぬとい云ども去かくあれ
き也又十九巻ごとも去かくそ思ふすとやそのひとそ去こゝろ
そよの心と思ひら詞也との比密勅ど年こゝろ今年こゝろ
同じ両説ども侍ども釈しられん人返もくに悩ましよ
ま共ハ去こゝろ共也引あなもう共橘花のあさやうまをあす
此歌ども去こゝろ花とようひくたとんもこゝろふくきこゝろんど向ひそい
ぬんやうにすべき詞なしもつもくをするとハいふべうすな
ぬまやとそあれこゝろ侍ども書れこゝろあを共ふすべく

この事也既に云ふ如く三句今年たるもあゝんずけやとも兼つき事論なく今年ともをもはゝんずけやとするも彼つき事自然の語勢也其余もある年たるをあゝれやとするも更にあるべからずこの類の句多くかゝる事既に無用の用をそこに其意をするやうなる句也又俊頼俊恵等の一連也春上 四十七

この事也既に云ふ如く三句今年たるもあゝんずけやとも兼つき事論なく今年ともをもはゝんずけやとするも彼つき事自然の語勢也其余もある年たるをあゝれやとするも更にあるべからずこの類の句多くかゝる事既に無用の用をそこに其意をするやうなる句也又俊頼俊恵等の一連也

云ふ同事也又外なく意をこゝにやとせる乃例既に云ふ如事上に盡せるこれも或人難じ云ふ如き事なき共鳴ぬと同意にて芸よりも鳴ぬ勝なり千やとつゞけたる大意を云ひてあるべしとやとつゞけたる大意を云ひてあるべしとやとつゞけたる大意を云ひてあるべしとや

○遠鏡ニセメテ春ノ一月加ハツテ長イ今年ハカリナリ此人ノ心ニタンノウスルホトユルリト咲テアツタカヨイニナセニイツモト同シヤウニ今年モ早ウナルソイトこゝろ計ハ此事也とてもナをあけうる事ハ

なるほどあれよりもそこやもすると無下にわろくとも云ふべきやうもなけれどもそこやもすると更によくとも云ふ計ハ此事也とてもナをあけうる事ハ多也とほそこうる也舎弟ニ此一首の意をよりてあたさまのさん事いつまでもなきを其一首の意をよりてあたさまのさん事いつまでもなきを

なる早う散うつのそこの心ハ詞ハそこ風也詩勢句調共ニ先ハ其ハ彼もるせ文のあまりさ論るとハ其ハ雖しもとあきつく乃詞也元實ハ過ぐく文ハ宣處ニなるまでる仏の中ニ出てる和義ハそこ雖ニハ其ハ盛水乃盈満ぐ溢出ニこゝろのつくとあきつく成ハ其ハ如しそれもあきつくた十分ニ過てる意也

て明るともなく降とくらし雪とうち果るまでそれとも消すも
も有とこもあらとも見まゐや春は花ゐまつるとつみ乱花ゐと
みくらのやさそ春は意もさまあくさそ移も果ぬ程は同来
ることそそくをも見は今はまおられてそ変やくよ我
人の物と成てんさうん時そおとひとも春は書物はとるる
つくんやと都くもう来くさるをもとうひつの也
も也消すく消すは也まをもはうりつまを古は常なり門
人能谷直好云贈答の歌の詞書は甚名をそす人とのを書る
も時其よを人をれさるものあはされを此奇を恭渡ひ云ひと
しくよみ人しますなりくんとをうくん波人物語よりも業平

のをもくくこかなるへしさるはそそ此詞をうは此花の盛は業平
朝臣はことなくてを舎の例よなりつまとつ
○徐枕は此他者也ゐ有つうす其故い年頃音信及如ひ件い
さうをはんよおこんひまさをとりはとつうは此は年は希
なりとつうは年こうとさるそくるもいう年こうを年をふる
まつるく数年は隔つるをいう年はまれなるい年間はまくく
うる人也しうたまくさうくるは花の盛はあつる事よりいつる
如し陸奥はまことい年は意よ花は郷しうちとそは詞書の表
はあしす伊勢物語は此歌の所は桜の盛は見はきうる也
年はとまるは件例の意は得さるものは年は希なるは年久し

さそふ共花のさそひを見るまうてきこうろう人すのさ
てゐるやけろ
三河
ヨ、やの花こそそうよろうしともちやれんのちをこめかう色き
詞を見ろう常たこ夜人のの共花共のやにとふひろ也され
た實ハみをうやきくく来ますき入れたさろ方共遠くしさ
をうすりきこうそうまをとろ此一この風一きなとこのまくこうる也實
よなつうむよあうをさいれをかく浅よようくなうう也
しかろへきとくまくこくかれ先くやめ也
亭子院歌合の時よめる　伊勢
見る人をなき山里共さろう花のよちやれん浪そさう沖

おろれくろん世よ物りそ路うとそとそかくも見ろ人ち
きたのひなろれた山里共楊た外の散くろん浪よ咲てき事
也さ添た世の花を見果ろ人共なれ君こんをこめことせめて
佛てを進まる方を祈る迄浪うさめまくハ浪よ咲なんれと
よろんろ勢ひあろ頃よあくす止を得さろ共意を知一渡授よ
紀氏の風をうよ祈うをそ花共散なまくん浪のうたうろの
うきとよのみ路ろをたろよちまた花の心のう移ろんそそと
うけまた風をまちそうなれよをなも風よちろをうれや
せんうことなさふさろ方をへ帯ろ也道浪の桜花ろみ也逃
しやこにとう共きけさのすろ有ますとろまれろる花ろき

こゝろよき事なれと申し給へりはとくつゝまで皆お
まの〳〵ふるまひてくらんとおもひそまゝと笑ふ
頭さ詰襟を時々〳〵なか僕さまの外ちやさ
浴さ居ますまゝちやうに二着を脱さ袖とちれさよつて
きつくさ申ようらうれとつゝまぬ事也